

「やまとうた」と「からうた」

——古今和歌集の序文から見る——

胡 潔

はじめに

周知の通り、905年に編纂された古今和歌集は日本最初の勅撰和歌集である。醍醐天皇の命を受けて、紀貫之ら数人の宮廷官人によって編纂されたこの歌集は、色々な意味で日本文学史上の一転換点を示している。それまでの勅撰集といえ、嵯峨天皇の時代に編纂された『^{りょううんしゅう}凌雲集』(814)、『^{ぶん か しゅうれいしゅう}文華秀麗集』(818)、それから次の淳和天皇の時代に編纂された『^{けいこくしゅう}経国集』(827)の三大漢詩集である。しかし、これらの勅撰集は「^{やまとうた}和歌」の集ではなく、「^{からうた}漢詩」の集である。九世紀前半、所謂漢文学の隆盛期の産物である。このような漢文学全盛時代を経て、九世紀後半からようやく和歌復興の兆しが見え、『新撰万葉集』や『千里集』(句題和歌)などのような、漢詩から和歌への過渡を示す作品が現れ、また「寛平御時后宮の歌合」のような宮廷の歌合も催された。いよいよ和歌が漢詩に代わって晴の場へ進出する時代に入る。このように、九世紀を通して次第に形成されつつあった和歌文学の土壌から古今集が生み出されたのである。従って古今集の使命は、日本の古来の「やまとうた」の理念と権威を樹立するところにある。この意味では、古今集の編纂目的を語る序文を通して、当時の日本人の外来文化と自文化に対する考え方——ここでは具体的に「^{からうた}漢詩」と「^{やまとうた}和歌」に対する考え方になるが——を見ることは、あながち見当違いではあるまい。

ところで古今集は二つの序文を持っている。漢字で書かれた所謂真名序と、仮名で書かれた仮名序である。一つの作品に二つの序、漢文序と和文序が併記されること自体、古今集の日本文学史上における画期的位相を象徴的に示して

いるものと思われるが、両序に記された期日は同一ではない。真名序は延喜五年四月十五日となっており、仮名序は延喜五年四月十八日となっている。この両序の期日の相違及び成立の問題についてこれまでいくつかの議論があったが¹⁾、ここでは取り上げる余裕がない。ただ、両序の記された期日がさほど離れていないことから考えると、奏上時にまずは真名序——これは前例に倣ったことだが——が書かれた後に、最初の勅撰和歌集に相応しい仮名序が必要だと感じたのか、或いは真名序では自分達の肉声を十分に伝えられないもどかしさを感じたのか、撰者らがもう一度仮名で序を書いた、という推測も可能であろう。序文の作者については、現在の通説では、真名序は紀淑望、仮名序は紀貫之がそれぞれ書いたとなっており、それを否定する材料もないので、本稿はそれに従いたい。両序の記述に順序やニュアンスの差がみられるものの、大体においては同じで、大づかみに言うと、1) 和歌の本質とその効用、2) 和歌の起源とその歴史、3) 古今集編纂の経緯と撰者らの抱負、の三つからなっている。

これまで、古今集の序文については多くの研究が積み重ねられてきた。歌論の研究においては、仮名序を取り扱うものが多く²⁾、また比較文学の観点から両序の、中国の詩学理論との関係、特に毛詩大序や白楽天の「與元九書」との関係に関する指摘も数多くなされてきた³⁾。いずれも貴重な研究であるが、本稿の関心事は、両序の作者達がどのような意識を持って、「やまとうた」の理念、効用、歴史を記したのか、さらに彼らが「からうた」と「やまとうた」の関係をどのように考えていたのかにあり、彼らの言説からその一端を探ってみたい。

古今以前の漢詩と和歌の交流

勅撰漢詩集の編纂から勅撰和歌集の編纂まで、百年近くの年月を要した。この間日本国内の政治状況にも対中国関係にも大きな変化が見られた。特に九世紀後半以降の日本は政治史で言うと、摂関政治の初期に入り、藤原氏（北家）が天皇家と「身内」の関係を結成することによって、着実にその政治勢力を伸ばしていた時期である。摂関政治というのは、帝の母方の祖父や叔父が帝の後見役として政権を握る政治形態で、帝の後宮に入る女性が未来の帝を産む可能性のある大事な存在と目されていた。女性が宮廷政治の中核に重要な意味を持つと、それまで主として女性の間で使われていた仮名や和歌も次第に重要さを増してくる。一方、これまで文化の発信地であった中国との関係にも変化があった。九世紀後半から中国国内の政治情勢が不安定となり、九世紀末には戦乱

が起こったのである。そのため菅原道真が寛平6(894)年に遣唐使廃止を提案した。この遣唐使の廃止をきっかけに、これまで盛んに行われた唐との公的な国交関係が一旦中断する形になる。このように、外的には唐の衰退、滅亡による漢字文化の圧力の弱化、内的には自国文化の成熟は、和歌の復興、ないし日本文化の復興の準備をなしていたと見てよからう。

すでに多くの先学によって指摘された、九世紀後半の和歌の復興の筋道は「歌合」や「屏風歌」の流行にこれを見ることができる。特に光孝・宇多朝は歌合や屏風歌の隆盛期である。現在もっとも古い歌合とされている『在民部卿行平歌合』が光孝朝に行われ、「寛平御時后宮歌合」(889)や「是貞親王家歌合」(仁和二宮歌合)(893)など、多くの歌合が宇多朝に行われたのである。また屏風歌は、歌合よりやや早く詠まれたが、それも宇多朝より数が増してきたものである。この意味では、古今集成成立以前の和歌の復興の過程を考えると、光孝・宇多朝の和歌に関わる事業の役割を見逃すことはできない。一方、漢詩受容史的に見ても、この時期は菅原道真、紀長谷雄、大江千里など優れた漢文学者が輩出した時代でもあった。このような漢詩と和歌がともに隆盛していた時期において一つ特筆したいのが、漢詩と和歌をひとつの集に編纂した作品の成立である。それは寛平五年(893)に菅原道真が編纂したとされている『新撰万葉集』⁴⁾や、寛平九年(894)⁵⁾に大江千里が編纂した「千里集」(句題和歌)などの作品である。前者は今挙げた「寛平御時后宮歌合」の歌を主な素材に、その歌を真名で記載し、それに七言絶句を配したもので、後者は当時流行の白楽天の詩やその他の詩人の詩から一句を取って、それを和歌に訳したものである。和歌を前提に漢詩を作るのと、漢詩を前提に和歌を作るのは無論違うことであるが、しかし、漢詩と和歌の表現の関係性を模索している点は両作品の共通点と言えよう。『新撰万葉集』の漢詩を見てみると、ただ和歌を漢詩に訳したというよりも和歌に近い意味の漢詩を作ったといったほうが的確である。例えば、

ちるとみてあるべきものを梅の花うたて句の袖にとまれる
 春風触処物皆楽 上苑梅香開也落
 淑女偷攀堪作簪 残香句袖扠難却

というふうに。古今集に入っている素性法師のこの歌はもともと「花が散るな

と見ていればよかったのに、手で触れてしまったので、梅の花の香が袖に残って、花の思い出がいつまでも残って困る」という、花を愛惜する心情を詠んだものであるが、それに配している漢詩を見ると、あたかも仕女春遊図のような趣になっている。そしてもとの和歌にある「梅の花が散る」と「花の香りが袖に残る」という内容はそれぞれ「上苑梅香開也落」と「残香匂袖払難却」に相当し——これにももとの和歌にない余分の意味が含まれているが——、「春風触処物皆楽」「淑女偷攀堪作簪」の部分はもとの歌にない「余分なもの」であろう。ここは文人の想像、遊びと言えればそれまでであるが、漢詩の対句表現ルールや、漢詩の表現パターンから考えれば、その部分がなければ均整のとれた詩にはならない「必要なもの」である。逆に『千里集』のような、漢詩に和歌を配する場合になると、今度は一首の漢詩の一句を取り出して和歌に訳さなければならなくなる。例えば

おうせいにゆういんせられてかかにきたり

鶯声誘引来花下（白氏文集18卷春江）」

うぐひすのなきつるこゑにさそはれて花のもとにぞ我は来にける

というふうに。当時の人々の漢詩と和歌の翻案の仕方から、彼らが経験的に漢詩と和歌のそれぞれに載る情報量の相違を認識していたことが分かる。また、『新撰万葉集』に

ゆうされば ほたるよりけに もゆれども ひかりみねばや ひとのつれなき

という歌が見える。古今集では紀友則の歌になっており、「夕方になると私の思いが闇を飛ぶ螢の火よりも一層燃えるが、私の気持ちが分からないせいか、あの人が平然としている」という意味であり、どちらかと言えば、男性の、女性への思慕の歌と考えられる。しかし、それを翻案した漢詩を見ると、

怨深喜浅此閨情 夏夜胸燃不異螢 書信休来年月暮 千般其奈望門庭

と閨怨詩的に仕上げている。概していえば、『新撰万葉集』ではこのような恋の歌を閨怨詩的なものとして仕上げているものが多い。その理由は恐らく六朝詩の表現の「杳」に牽制されたことにあるであろう。『玉台新詠』などを見れば、「螢」という言葉が詩語として使われているのは概して閨怨的なものが多いこ

とが分かる。一方、和歌においては、「螢」はむしろ「燃える」という語と縁語関係になっていることが多く、恋人を思う気持の激しさを詠む歌語になっている。このような漢詩にはない表現を取り入れてできあがったのは「夏夜胸燃不異螢」である。こういった和製の表現が多いことは、恐らくこの集の漢詩が拙作と言われるゆえんであろうが、漢詩と和歌の表現の異同を模索する上では意義が大きい。これについてはまた別稿に譲るが、和歌の復興の過程において考えてみると、和歌に漢詩を配したり、漢詩を和歌に変えたりして、両者を並べることにより得られたのは、漢詩と和歌に対する相対的な見方ではないかと思われる。漢詩のみを宮廷の「みやび」と見る前時代の文学観と違って、和歌と漢詩を対等に並べてみるところに新たな意識が生れたとみてよかろう。このことは、古今集の成立及び古今集序の和歌観、漢詩観を考える上で看過できないものがある。

「心」と「言葉」

古今集仮名序の冒頭に

(1) やまとうたは、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言ひ出せるなり。(2) 花に鳴く鶯、水にすむ蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。(3) 力をも入れずして、^{あめつち}天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、^{おにがみ}男女^{をとこをんな}の中をも和らげ、^{たけ}猛き^{もののふ}武士の心をも慰むるは歌なり。

とある。「やまとうた」という語は勿論漢詩を意識して用いられるものである。ここでは「やまとうた」の(1)歌の発生、(2)歌の本質、(3)歌の効用が述べられている。和歌は「人」の心にあるものが言葉を通して現れてくる、という。一方、先に書かれたと思われる真名序では

(1) 夫和歌者、託其根於心地、発其花於詞林者也。人之在世。不能無為。思慮易遷。哀樂相変。感生於志。詠形於言。(2) 是以逸者其声楽。怨者其吟悲。可以述懷、可以發憤。(3) 動天地、感鬼神。化人倫。和夫婦。莫宜於和歌。

とある。両序ではほぼ同じことが述べられているが、(2)の部分はいぶ趣旨

が違ふ。これは恐らく真名序のほうが原典となる毛詩大序（以下「詩序」と略す）の叙述順序をより尊重したためであろう。詩序では

…（1）詩者志之所之也。在心為志。發言為詩。情動於中。而形於言。言之不足。故嗟嘆之。嗟嘆之不足、故永歌之。永歌之不足。不知手之舞之。足之蹈之也。情發於声。声成文。謂之音。（2）治世の音。安以樂。其政和。乱世の音。怨以怒。其政乖。亡国之音。哀以思。其民困。故正得失。（3）動天地、感鬼神。莫近於詩。（4）先王以是經夫婦、成孝敬。厚人倫。美教化。移風俗。（5）故詩有六義、一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌。

となっており、真名序の叙述順序は、ほぼそれに即しているのが分かる。下線のついた部分「詩は志の之く所なり。心に在るを志となし、言に発するを詩となす、情は中に動きて、言に形はる」、「てんちを動かし、鬼神を感ずるは詩より近きは莫し」、「夫婦を経し、孝敬を成す」などの部分は明らかに真名序、さらに仮名序の記述の依拠するところとなっている。そのほか、白樂天の「與元九書」も両序の表現に影響を与えている。「與元九書」は白樂天が友人元稹にあてた書信で、その中に白樂天の文学観を書かれている。

詩者根情苗言、華声実義。上至聖賢、下至愚騷。微及豚魚、幽及鬼神。

詩を植物に例えたこの発想が直接に真名序「託其根於心地、発其花於詞林者也」と仮名序の「人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける」にヒントを与えている⁶⁾。ただ、古今の両序と詩序や與元九書の共通点は、人間の「心」と言葉の関係においてのみで、その後はそれぞれ違う方向へ展開していくことは見逃せない。詩序においては、（1）詩の発生、（2）詩と人心の関係、（3）詩の効用、（4）先王の詩の政治利用、（5）詩の六義という順序で述べられ、最も中心をなす部分は詩の社会的意義と政治的効用を述べる（2）と（4）の部分ではないかと思われる。即ち、政治が安定すれば、「治世の音」となり、不安定になると、「乱世の音」になる。さらに国が滅びると、哀れに聞こえる「亡国の音」となる。ここで述べられている「詩」は人心を反映する鏡であると同時に、また人心をコントロールする道具でもある。しかし、古今集両序においては、このような中国の詩学の伝統ともいえるべき政教思想にはあまり触れられていない。それについては後述するが、真名序では、詩序の政治的意味が取り除かれ、も

っとも普遍的な人間の喜怒哀楽に変わっており、仮名序では完全に排除されている。そのかわりに、仮名序はそこから和歌の起源と歴史へと展開していく。

「かみよ」と「やまとうた」

仮名序では、和歌の起源について次のように述べている。

(4) この歌、天地のひらけはじまりける時よりいできにけり。ちはやぶる神世には、歌の文字も定まらず、素直にして、言^{こと}の心わきがたかりけらし。人の世となりて、素盞鳴尊^{すさのをのみこと}よりぞ、三十文字あまり一文字^{ひと}はよみける。

「この歌は天地創世の昔から世に現れている。神世にあっては、歌の音数も一定せず、飾り気なくありのままに歌ったので、歌われていることの意味を判然と識別しにくかったのに違いない。それが人の世となって、スサノオノミコトの時から初めてみそひともじの歌を詠むこととなった」という。一方、真名序はすぐには起源論に入らず、

(4) 和歌有六義。一曰風。二曰賦。三曰比、四曰興。五曰雅、六曰頌 (5) 若夫春鶯之囀花中、秋蟬之吟樹上、雖無曲折、各發歌謠。自然之理由

と和歌の六義と歌の「自然の理」を述べてから

然而神世七代、時質人淳。情欲無分。和歌未作。逮于素盞烏尊到出雲国、始有三十一字之詠。今反歌之作。其後雖天神之孫、海童之女。莫不以和歌通情者。

と和歌の起源論に入る。恐らく真名序の作者が、詩序に述べられた詩の社会的効用と六義の一体的関係を認識していたので、詩序と同じ順序で書いたのであろう。それに比べると、仮名序は歌の起源に力点を置いていることが際立っている。叙述そのものも、真名序が「時質人淳。情欲無分。和歌未作」と、神世の和歌の未発達を述べているのに対して、仮名序は「この歌、天地のひらけはじまりける時よりいできにけり」と、神世から発生した和歌の悠久さを強調している。「天地のひらけはじまりける時」という書き方は、『古事記』や『日本書紀』の天地創造の叙述にも通じる。『古事記』序に「乾坤初めて分れて、参^みはしらの神造化^{よろづのもの はじめ}の首^なと作れり」とあるように、創世神話に用いられている表現

である。古事記は文学作品と見られているが、しかし編纂者自身は文学作品を書こうと考えて編纂したものではない。太安万呂が切実に思ったのは、「国邦の経緯」すなわち系譜をただすことであり、その意味では、古事記の編纂者は強烈な政治意識を持っていたと言えよう。このような政治意図に対して、古今集は和歌集であって、文学作品の編纂目的は歴史書のそれとはおのずから違うが、しかし両者の共通点は、帝王の系譜にしる、和歌の歴史にせよ、古来の伝統を重視する姿勢である。もし「人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける」云々の詩序の引用が漢詩と共通する一面を見出そうとするものならば、「かみよ」に関する言説は、漢詩と違う和歌の歴史を強調しようとするものといえよう。明らかにここで撰者らが強調したいのは、神の世に起源を持つ和歌の長い、古い伝統である。後に紀貫之の弟子である壬生忠岑が『和歌体十種』に「夫和歌者、我朝之風俗也、興於神代盛於人世」と言い、能因が撰した『玄玄集』の序にも、「和歌者本朝之風俗也。源流起於神世、雅詠盛於人世」と、悉く仮名序を踏襲していることを考えると、仮名序にある「かみよ」は自国文化の独自性を強調するキーワードとして機能していたことが分かる。

このような自国文化に対する自負が漢文学の隆盛期にすでに見られた。九世紀の半ばごろに成立した『日本霊異記』の序文に、書名の由来とその書物を書く動機が次のように記されている。

昔、漢地造冥報記、大唐国作般若験記。何唯慎乎他国伝録、弗信恐乎自土奇事。
奥起自矚之、不得忍寢。居心思之、不能默然。故聊注側聞、号曰日本国現報善惡
霊異記。

漢・唐に冥報記や般若験記が書かれたのに対して、景戒は「自土の奇事」を書こうとした。他国の文化を盲信する風潮を批判し、「自土」の文化を伝えようとする作者の気概がこの序文を通して感じ取られる。さらに十一世紀に成立した『源氏物語』にも「かみよ」という言葉が見られる。「蛩」の巻に、源氏が養女の玉鬘を相手に物語について論じている箇所である。

神世より世にある事を記しおきけるななり。日本紀などはただかたそばぞかし、
これらにこそ道々しく詳しきことはあらめ

「ものがたりというものは、神世以来この世にあることを書きのこしたものと

いいです。日本紀などはほんの片はしにすぎないものです。これらの物語にこそ、かえって委細を尽くした事柄が書かれてある」と言う。ここに用いられている「神代」も、同じく古くから伝わってきた物語を議論するのに使われていることに注意すべきである。神話、説話、和歌、物語など、日本が古来持っていた文芸に対する自負がこの「かみよ」の言説に読み取れる。この意識は漢詩集の序と比べると明らかである。日本最初の漢詩集『懷風藻』の序に、

・・樞原建邦之時。天造草創。人文未作。至於神后征坎。品帝乘乾。百濟入朝。啓龍編於馬廐。高麗上表。圖烏冊於鳥文。王仁始導蒙於輕島。辰爾終敷教於譯田。遂使俗漸洙泗之風。人趨齊魯之学。逮乎聖德太子。設爵分官。肇制礼儀。然而專崇釈教。未遑篇章。及至淡海先帝之受命也。恢開帝業。弘闡皇猷。・・調風化俗。莫尚於文、潤德光身、何先於学・・

とある。編纂者がまず天智天皇の時代までの状況を回顧し、天孫降臨から神武時代を「天造草創期にあたり、人文はまだ起こらなかった」とし、その後百濟から漢籍が流入してきてから、「遂に俗を洙泗（儒学）に漸め、人を齊魯（儒学）に趨かしむ」ようになったとしている。そして聖徳太子の仏教尊重を「未だ篇章に遑もなかりき」時代とし、本格的に「文を尚ぶ」ようになったのは天智天皇の時からだという。明らかに『懷風藻』の場合は、風俗の開化が儒学の導入に帰しており、それをいち早く吸収する政策をとった帝王は英邁な帝王であるとしている。ここで言う「文」というのは、広義では儒教の書物全体、狭義では漢詩文を指すと思われる。漢詩文による教化を重んずる懷風藻の編纂者の文学史観と、自国文化である和歌の根源を神世に求め、それによって権威づけようとする古今集の編纂者の文学史観とは対照的といえよう。

「歌の様、六つなり」と「六義」

先述したように、詩序において、詩の政治的効用を述べた直後に六義について述べており、真名序も同じ順序である。仮名序のみがすでに述べたように和歌の起源論が先行し、その後に「そもそも、歌の様、六つなり。唐の詩にもかくぞあるべき」といい、和歌の六つのさま——「そへ歌」、「かぞへ歌」、「なずらへ歌」、「たとへ歌」、「ただごと歌」、「いはひ歌」——を具体的な例歌を挙げて説明している。詩序の六義と古今両序、特に仮名序の六つのさまとの関係に

ついて、古注から多くの議論が重ねられてきた。最も問題となったのは、仮名序に挙げられた、六つのさまの例歌と詩序の六義との不一致ではないかと思われる。ここでまず三者の関係を次の表に挙げておく。

毛詩 大序	真名 序	仮名序	例歌
風	風	そへうた	^{なに はづ} 難波津に咲くや木 ^こ の花冬こもり今は春べと咲くや木の花
賦	賦	かぞへうた	咲く花に思ひつく身のあぢきなさ身にいたつきのいるも知らずて
比	比	なずらへうた	君に今朝朝のしものおきていなばこひしきごとにきえやわたらむ
興	興	たとへうた	わが恋はよむとも尽きじ ^{あり ぞうみ} 荒磯海の浜の ^{まさご} 真砂はよみ尽くすとも
雅	雅	ただことうた	いつはりのなき世なりせばいかばかり人の言の葉うれしからまし
頌	頌	いはひうた	この殿はむべも富みけり ^{さきくさ} 三枝のみつばよつばに殿づくりせり

さて、『古今和歌集』（日本古典文学全集 小沢正夫校注）の仮名序の行間についている古注⁷⁾を見ると、仮名序に挙げられた例歌に対していろいろ非難をしたあげく、「おほよそ、六種に分れむことは、えあるまじきことになむ」と結論づけている。確かに、詩序の六義の原義と仮名序に挙げられた例歌の間に意味のズレがあることは否めない。ゆえに古今集序で言う六義の名は中国の詩論から借りただけで、意味は違うという見方⁸⁾が存在するのも一理あるように思われる。しかし真名序が詩序の「六義」をそのまま踏襲しているところから考えると、仮名序は一応詩序の「六義」に即して論じているとみたほうが順当であろう。問題は撰者らが「六義」をどう認識したか、どう解釈したかである。そもそも詩序の六義は、中国においても長い間議論があり、はっきりとした定説がない。通説では風、雅、頌は内容による分類で、賦、比、興は修辞法による分類とされている。つまり三つの部類と三つの修辞法を指している。これは一見矛盾しているように思われるが、それに先行する先王云々の政教的詩論の文脈から考えれば、「上以風化下、下以諷刺上」という君臣、君民間のコミュニ

ケーションの方法論としては統一されていると思われる。「風」は国風で地方の民謡を指し、詩序では「上以風化下、下以風刺上、主文而譎諫、言之者無罪、聞之者足戒、故曰風」と解釈している。それに対する仮名序の「そへうた」の「そふ」も「あるものを他のものにみなして考える」（古語大辞典）という意で、直接ではなく、他のものによそえて君王を諫める点では、両者に共通点がある。一方「雅」は大雅、小雅のことで、西周の宮廷貴族の詩を指す。詩序では「正也。言王政之所由廢興也」と解釈している。従って、仮名序の「ただうた」も「雅正」なるもので、典範性を示す歌を言っているのではなかろうか。例歌から見ても、「いつはりのなき世」というのは、修辞法というよりもただしい規範を言っているように思われる。「頌」は「美盛徳之形容。以其成功告於神明者也」と言っているので、謳い讃える意味では「いわひうた」に通ずるであろう。三つの修辞法「賦」、「比」、「興」も、それぞれ「かぞへうた」、「なずらへうた」、「たとへうた」と対応しているように思われる。古注では「賦」にあたる「かぞへ歌」の例歌に対して、「これは直言にいひて、ものに譬へなどせぬものなり。この歌、いかにいへるにかあらむ。その心、えがたし…」と評しているが、しかし、「賦」の性格は「言鋪、直鋪陳今之政教善惡」（鄭注）という解釈から見ても分かるように、比喩など使わない「直言」の一面のほかに、「鋪陳」——言葉をたくさんつらねて述べるという特徴——があることも忘れてはならない。すでに指摘されたように、「かぞへ歌」は「いくつものの掛詞を利用した、縁語仕立ての歌」で、それも「言葉をつらねる」という「賦」の属性に通ずると言えよう。「比」と「興」に至っては、完全に対応しているとは言えないが、仮名序の例歌から考えると、「なずらへうた」は「物象と心象とが同化、一体化していく比喩」、「たとへうた」は「物象と心象とを対立させ、両者の共通するある属性を取りたてて対比する比喩」として挙げられた、という見解は一応妥当であろう。⁹⁾ 即ち、撰者らなりにこの二つを比喩法として弁別していたのである。このようにみてくると、詩序の「六義」と仮名序の「六つのさま」はおおむね対応しており、少なくとも撰者らは、詩序の六義に対応させることを意図して「六つのさま」を挙げていると思われる。その翻案法は、詩序の六義の意味から和歌に適用できる部分——漢詩固有の思想や漢語ならではの修辞法を取り除いた、より一般的、普遍的要素——を吸収したものである。撰者らは「六義」を漢詩のみが有する属性ではなく、和歌にも存在する普遍的なものとしていたのではないか。そして、彼らにとって、「六つのさま」を挙げることは単なる詩

序の六義の翻訳ではなく、和歌の中に本来的に存在していた「六義」を見出すことであった。「唐の詩^{からうた}にもかくぞあるべき」という一見いかにも屈折した言い方は、このような文脈の中において考えてみれば頷かれる。「からうた」に存在している六義と同様に、歴史の長い「やまとうた」にももともと六つの様が存在していた、「やまとうた」も「からうた」も本来人間の真情を表出する上では差がないというのが、撰者らの主張ではないか。このような考えは、紀貫之が書いた『土佐日記』にもはっきり現れてくる。貫之はこの日記に、唐土へ行った阿倍仲麻呂のことについて書いている。阿倍仲麻呂が帰国する際、唐の友人らが馬の餞に惜別の詩（からうた）を作って贈った。夜が更けて月が昇ってきたのを見て、阿倍仲麻呂が「こんな時、わが国は昔からこのように詠みます」と言って、

あおうなばら かりさけみれば かしが みかさ い
青海原 ふりさけみれば 春日なる 三笠の山に 出でし月かも

とやまとうたを詠んだという。唐の友人らは日本語が分からないので、歌の意味を言葉の分る人を通して説明したら、友人らが大変感動したというこのような話を書いて、貫之が「唐土とこの国とは、言^{もろこし}異なるものなれど、月のかげは同じことなるべければ、人の心も同じこと^{ことこと}にやあらむ」と記している。「唐土と日本とは、言葉は違うけれども、月の光は同じことなのであるから、おそらく人の心も同じなのであろう。からうたもやまとうたも人の心を表出するものであれば、根源的には同じである」という。古今集を編纂する撰者らの課題は、「からうた」と同じ価値が「やまとうた」にもあったことを証明することであった。

「いまのよ」と「いにしへ」

古今の両序のもう一つの特徴は、和歌の隆盛期であった「いにしへ」と、和歌の衰退した「今の世」とを対照的に捉えていることにある。真名序には

自天津皇子之初作詩賦。詞人才子。慕風繼塵。移彼漢家之字、化我日域之俗。民業一改。和歌漸衰。及彼時變澆漓、人貴奢淫。浮詞雲興。艷流泉湧。其實皆落。其花孤榮。至有好色之家、以此為花鳥之使。乞食之客。以此為活計之謀。故半為

婦人之左右。難進大夫之前。

と、和歌の衰退の原因を漢詩の導入に帰し、その後和歌の状況を述べている。一方、仮名序は、

今の世の中、色につき、人の心、花になりけるより、あたる歌、はかなきことことのみにくれば、色好みの家に埋れ木の、人知れぬこととなりて、まめなる所には、花薄ほに出すべきことにもあらずにたり。

と、漢詩の圧迫による和歌の衰退に触れず、専ら「人の心」を問題にする。これについては、漢文学者の紀淑望の、和歌への配慮という説もあるが、仮名序の、漢詩と和歌に関する言説からすると、あくまでも両者が対等性を持つ関係であり、一方が他方を圧倒するような優劣関係にあるのではない、という一貫した認識に基づいた処置ではないかと思われる。

そもそも真名序に見える「艶流」という言葉は、中国の詩論にはあまり見られない。『文華秀麗集』では近時の詩作の詩風について、「或気骨弥高。諧風騷於声律、或輕清漸長。映綺靡於艶流」と評したところに見える言葉である。この「艶流」は美辞麗句の文章を指していると思われるが、一方、この集に見える「艶情」の部の詩を見ると、専ら六朝の『玉台新詠』などの「宮体歌」を模倣したもので、閨怨詩的な内容である。ただ、美辞麗句を指すにせよ、内容を指すにせよ、いずれも否定の意味が見られない。しかし、先述した『新撰万葉集』あたりから「艶」とともに「花」という言葉が使われ、ともに文章の華やかさを指すようになる。その序文に

夫万葉集者古歌之流也。非未嘗称警策之名。焉況復不屑鄭衛之音乎。…当今寛平聖主万機余暇。举宮而方有事合歌後進之詞人近習之才子各献四時之歌初成九重之宴…而以今比古。新作花也旧製実也。以花比実。今人情彩剪錦多述可憐之句。古人心緒織素少綴不憖之艶。

とある。ここでは新旧の作が対比され、古人の作が「実」で「心緒織素少綴不憖之艶」であるのに対して、今人の作は「花」で、「情彩剪錦多述可憐之句」だと、今人の文章の華やかさにやや批判的である。さらに『千里集』になると、

…参議朝臣伝勅曰古今和歌多少献上。臣儒門余孽側聴言詩未習艶辞不知所為。今

臣僅枝古句構成新詞・

とある。自分は儒門の末裔で（父祖の傍らで）詩を論ずるのを聞いていたが、「艶辞」は未だ習っていないと言う。「艶辞」と一線を画する姿勢である。句題和歌の内容を見ると、その多くは白楽天の詩句からとって和歌にしており、恋歌がないのが特徴である。従って、この序文にある「艶辞」は恐らく「恋歌」を指すであろう。

このように、九世紀の後半から、「艶流」、「艶詞」、「花」に対する批判的意識が次第に明確に現れてきたが、それは当時の和歌の置かれていた状況と関係がある。光孝・宇多朝あたりから、天皇の和歌に対する情熱——上に挙げた二つの序文に悉く帝による和歌献上の命とあることから覗えるが——が大きな推進力となり、貴族社会全体に和歌に対する関心が高まり、和歌集を編纂する気運が醸成されていた。しかしながら、歌合や屏風歌など宮廷の室内で行われる和歌は、自分の心情よりもいかに巧みに詠むかという技巧的な面が重要視される。ややもすれば形式的になりがちで、うわべの「花」だけ追求することに陥りやすい。そして、この時代の和歌のもう一つの特徴はその私的性格である。漢詩隆盛期には、和歌が宮廷文化から追いやられ、晴れの間では用いられず、男女の間の私的贈答にしか用いられなかった。この時期にようやく宮廷において歌合や屏風歌が流行りだしたものの、和歌といえば、依然として私的贈答、とくに男女間の恋歌の道具という認識が強かったのではないか。すなわち、この時代には、「艶」の字によって美辞麗句のような形式美の「艶」と男女間の恋歌を表わす「艶」が重ねて意味されているのである。

しかし、このような、「今の世」の「艶流」、「艶詞」、「花」を批判し、「いにしへ」の古風を復興しようとする発想は、時代の状況もさることながら、もうひとつは、すでに指摘されているように当時の中国の文学思潮の影響がある。中国の詩論の歴史を概観しても、六朝とりわけ南朝の斉梁時代の文学に対してやや批判的であったことは周知のとおりである。このような批判はほぼ同時代の詩論からすでに見られ、梁の鐘嶸の『詩品』は晋の張華の詩を「其体華艶・猶恨其儿女情多、風雲氣少」と批判しており、北齊の顔之推も『顔氏家訓』の中で、「今世相承、趨末棄本、率多浮艶」と批判している。初唐の陳子昂は『修竹篇序』で「僕嘗暇時觀齊梁間詩、彩麗競繁、而興寄都絕。每以永嘆。思古人。常恐逶迤頽靡、風雅不作。以耿耿也。」と斉梁の彩麗競繁の詩風を批判し、漢魏の「古風」の復興を唱えた。これらの詩論において、「華艶」「浮艶」、「彩麗競

繁」といった言葉は詩風を指すと同時に内容も指している。そして、ここには詩風的には「華艶」と「風雅」との対立、時代的には「今人」の作と「古人」の作との対立がはっきり看取され、「今の世」の詩の衰退を嘆き、古人の詩の精神への復帰が唱えられている。これは古風復興提唱者の文学史観であると同時に、一つの叙述の定型ともなっていると言えよう。

言うまでもなく、真名序に見える「奢淫」、「浮詞」、「艶流」などの用語は、今見た中国の詩論と極めて近似している。仮名序の「あたなる歌」、「はかなきこと」などの用語を考えても同様である。「あたなる」とは、例えば、『伊勢集』の「思ふかひなき世になりけり年月をあたに契りて我や住まひし」や、『古今集』の「はなよりも人こそあたになりにつれいづれを先に恋ひむとかみし」などの用例から見ても分かるように、無駄な、一時的表面的で、実義のない物事をさす言葉である。そして「はかなし」も、例えば、古今集の「行く水に数かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり」や、『伊勢物語』の「年ごろ訪れざりける女、心かしこくやあらざりけむ、はかなき人の言につきて、人の国なりける人につかはれて」などの用例があるように、空虚な物事を指す言葉である。両語はいずれも実際の意義やしっかりした効用のない、価値の低い物事に用いられる言葉である。さらに両序ともに「好色」という言葉が使われているところを見ると、ここでは和歌の「華やかさ」を問題にしているというよりも、むしろその用途——男女間の私的な贈答歌に用いられていること——を問題にしているといえよう。しかし、古今集における恋歌の占める量を考えても、古今集の撰者らが男女間の恋歌を否定しているとは考えられない。この問題を考えるために、もうすこし序文の続きを見てみる。

そのはじめを思へば、かかるべくなむあらぬ。古の帝、春の花の朝、秋の月の夜ごとに、さぶらふ人々を召して、事につけつつ歌を奉らしめたまふ。あるは花をそふてたよりなき所にまどひ、あるは月を思ふとてしるべなき闇にたどれる心々を見たまひ、賢し愚かなりとしろしけむ。

和歌の衰退した「今の世」と対照的に描き出された「いにしへ」である。「いにしへ」においては和歌が公的な場で詠まれていたが、今は私的な男女間の贈答のような価値の低い道具に成りさがった、というのが撰者らが言おうとしていることではないか。ここには中国の詩論には見られないもう一つの対立、即ち、

いにしへ・公的和歌←→今の世・私的和歌の対立があった。前に古今集序の冒頭部分で、詩序や與元九書にある政教的思想を排除したと述べたが、政教思想と言っても、民を統治することに重点を置く詩經的政教思想と君臣唱和、文才によって人材拔擢に重点を置く経国思想がある。古今集の撰者らが憧憬しているのはむしろ后者である¹⁰⁾。周知の通り、古今集の撰者は他の勅撰事業と違っていずれも卑官であった。筆頭撰者の紀友則は正六位相当の大内記で、他は七位、八位であった。そのみならず、入撰した歌人の身分も半数以上は中下級貴族であった。このこと自体が端的に当時の和歌の文芸的地位を物語っているが、撰者らが最も嗟嘆したのは和歌が軽く見られている現状であり、最も憧憬したのは和歌隆盛の「いにしへ」であった。

古よりかく伝はるうちにも、ならの御時よりぞひろまりにける。かの御世や歌の心をしろしめしたりけむ、かの御時に、正三位柿本人麻呂なむ歌の聖なりける

彼らは国風暗黒時代以前の万葉時代に和歌の理想を求め、そして宮廷歌人として活躍していた歌人、柿本人麻呂に理想を求める。要するに彼らが最も願ったのは和歌の開花であり、和歌の尊嚴の回復であった。そして

…歌のさまを知り、ことの心を得たらむ人は、大空の月を見るがごとくに、古を仰ぎて今を恋ひざらめかも。

と、自分達の撰した和歌集が後代の範となることを希求し、和歌の永遠性を祈りつつ序文を結んだのである。

結び

最初の和歌勅撰集である古今集が編纂された際、撰者らは序文に和歌の起源、効用、歴史、理念に関する言説を残した。かれらは和歌の本質や効用を書くときに、中国の詩論に範を求めたが、あくまでも漢詩との対等性を前提に取捨選択をした。詩序の引用法や六義の解釈から、撰者らの和歌に対する自負が窺える。漢詩の発生と同様に和歌も人の心の反映として発生したものであり、また漢詩に六義を有すると同様に和歌にも「六つのさま」が存在することを説き、漢詩との共通性を通して、それに匹敵する和歌の文芸的価値を主張した。一方では彼らは和歌の起源を「かみよ」に求め、漢詩と違う和歌の固有性を強調し、

「いにしへ」万葉集以来の和歌の伝統の継承を提唱した。万葉の和歌に復帰しようとする彼らの言説は、六朝以来の「艶詩」や華やかな文体を批判する中国の詩論に依拠するところが多いが、めざす目標はもはや中国の詩人らのそれと違う。彼らが目指す「いにしへ」の復興は、漢詩に押されて「私的な贈答」に甘んじている和歌の現状の改変であり、漢詩文の宮廷文学としての地位に匹敵すべき、宮廷における和歌文芸の開花であった。

注

- 1) 勅撰集に二つの序があるのは異例で、これまでどちらが先に書かれたのか、どちらを正序とみなすべきかについていろいろな議論がある。真名序が先に書かれ、その後仮名序が書かれたというのが大方の見方であるが、仮名序の意味について、真名序が書かれた後に、撰者らはその不備に気づき、それを補うために書いたとする村瀬敏夫の説（『古今集の基盤と周辺』桜楓社 1971 年）と、真名序が読めない女性のために書いたとする片桐洋一の説（『古今集シンポジウム日本文学 2』1979 年）がある。さらにまた奏上時について、延喜五年の十五日とする説と十八日とする説とに分かれており、また古今集に延喜五年以降の歌も入っていることから、奏上は後年とする説もある。
- 2) 仮名序は本来ならば歌論書ではなく、あくまでも和歌集の序であるが、その中に和歌の修辞法や歌人に対する評価が含まれていることから、古くからそがれ歌論として見なされてきた経緯がある。現代の研究には、中島光風の『上世歌学の研究』（筑摩書房 1945 年）、太田青丘の『日本歌学と中国詩学』（清水弘文堂 1968 年）、小沢正夫『平安の和歌と歌学』（笠間書院 1979 年）、吉川栄治「古今集序の歌論」（『和歌文学講座』4 勉誠社 1993 年）などがある。
- 3) 比較文学的な立場の研究には、太田青丘前掲書のほか、新間一美「花も実も——古今序と白楽天」（甲南大学紀要文学編 1980 年）、興膳宏「古今集真名序覚書」（『文学』1985 年）新井栄蔵氏「漢と和——和歌の道——古今和歌集仮名序真名序考」（『国文学』1987 年 4 月）、などがある。
- 4) 『新撰万葉集』の成立については、撰者の問題、上下両巻の差の問題など、未だ不明な点が多い。平安末期の歌学書である『奥義抄』により、菅原道真撰かと言われているが、否定説もある。
- 5) 『千里集』は底本の系統によって、寛平 6 年のもの（伝寂蓮筆本）と寛平 9 年（書陵部本）のものがある。本稿は書陵部本の「寛平 9 年」に従う。

- 6) 新聞一美前掲論文
- 7) この古注を持たない古写本もあるので、仮名序の原形にはなかったと言われている。
- 8) 『古今童蒙抄』では和歌の六義を「名はからの歌を借るといへども、其義は各別せり」としている。
- 9) 石井裕啓「古今集仮名序の六義」（和歌研究会 2005 年 5 月例会.）
- 10) ただし、後年紀貫之が編集した『新撰和歌』で自分の編纂意図について「皆是以動天地感神祇、厚人倫成孝敬、上以風化下、下以諷刺上」と、かなり詩序的政教思想に依拠して言っているところからみれば、古今序の作者達が完全に詩經的政教思想を排除したともいえない。ここではやはり和歌の宮廷文芸としての復権に力点を置くための削除と考える。